

〈脱成長〉時代の児童文学 (第二回)

……………「共有」という現実

佐藤 宗子

近代日本の児童文学を段階的に示すとき、大まかには「お伽噺」↓「童話」↓「児童文学」という総称の変化で流れを示し、また第二次大戦後の「現代児童文学」出版以降、「子ども」を読者対象として明確に設定した「児童文学」が続いてきた——とする説明は、この三十年ほど、とりあえずの概括としてありうるものであった。しかし、今日の時点に立って考えるなら、「現代児童文学」を、「児童文学」状況における一つの特異なありかたとして捉え直すことをしてみてもよいのではないか。

1 一九五九年を「児童文学」の一つの画期とすること自体は、妥当なものと考ええる。その年に人間と小人の関わりを描いた二つの長編刊行は、確かに大きな出来事である。もっとも、「子ども」読者を強く念頭に置いた長編執筆の実現という意味では、五四年の国分一太郎『鉄の町の少年』

(新潮社)を先駆とすべきだろう。△「子ども」への関心・散文性の獲得・変革への意志(宮川健郎が『現代児童文学の語るもの』(NHKブックス、九六)で指摘する「現代児童文学」の特徴)という三点が明確に揃い、なおかつ一定の評価を得る作品となり得ているのだから。あるいは、そうした状況の前段階として、五〇年を設定してもよいかもしれない。それは、「岩波少年文庫」(岩波書店)、「世界名作全集」(講談社)という二つの叢書が刊行開始された年である。

この時期の特徴を別の言い方で表すならば、すべての子どもを等し並みに「子ども」一般として、同様にすべての大人を「大人」一般として、それぞれに属する者を「平等」に捉える一方、その両者は明確に分けて捉えるまなざしが、理想的に成立したということだったのでないだろうか。その結果として、「大人」一般が「子ども」一般に「児童文学」を手渡すという、一つの理想的な構図を描き得た、